

かれこれ半世紀以上も前のことなりき。人生において衝撃的なる出来ごとに遭遇せり。父の赴任地パリ最初の夏のことなりと記憶したり。父はオックスフォード大學を卒業したれば、友人歐洲に多かりき。夏休みに夫婦して旅行すべく、子供たちをスイスの修道院に預けたり。吾七歳、妹五歳なり。さることとは知らず親と共にパリよりスイスマで車にて楽しくドライブせり。修道院到着後、一時間程修道女たちと親は話し會ひ、吾らに「それぢやあ三カ月後に迎へに来るゆゑ、おりこうにしたるのよ」と手を振り、歐洲ではやたらに大きなアメ車のフォードは滑り出したり。妹はぎやあぎやあ泣きたるが、吾は凍りつきたるまま車を見送り、これは泣きてある場合ならずと子供心に思ひき。吾らフランス語はまったく話さず、どのやうに修道女たちと交信せむや。三か月もどのやうにして過ごさんと恐怖のあまり泣かんと欲すれども、泣くだに能はず。この青天の霹靂、後にいかなる状況にありとも氣丈に立ち向かふ柔軟さと強靱な精神をさ備へさせたりと、社會人になりたるとき思ひき。

今となりてはこのスパルタ教育を親に感謝するものの、その時は生きてる心地がせざりき。

ショック大きく、妹便秘になり、修道女に薬與へられ、夜中に腹こはし、泣いて吾がベッドに來たれり。七歳の吾臭き妹と一緒に横たはり、翌朝起きとてつもなき事起りしことに氣がつく。シスター呼びに行し記憶あれども、その後の結末はまったく覚えをらず。吾の寫眞アルバムにはその修道院より兩親に郵送せし綺麗なる佛語のカード残りたり。吾書きたりと覺ゆれども、自分たち元氣に過ごしたるなどと書きてあり。父は常々子供柔軟にていかなる状況にてもその場所に溶け込むことありと言ひたれど、まことに然りと覺ゆ。三年半パリに住みたれば、歸國せし後、日本語いささかも話す能はず。今のごとく日本語の情報あらず、日本人少なく、手紙の航空便届くまで一週間かかりき。パリに行くにもプロペラ機にて三日かかりたり。マニラ、サイゴン、ボンベイ、カラチ、カイロ經由と記憶せり。給油するたび航空機より降ろされ、風にそよぐヤシの葉の音、カレーの香りなどどころどころ記憶あり。吾パリへ行く直前右腕骨折し、ギブスせしまま旅せしゆゑ、苦勞の連続なれど、その記憶定かならず。